
悪魔と剣士と

kuroyumi

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と剣士と

【著者名】

kurouyumi

N4818P

【あらすじ】

悪魔と姫と剣士の物語

ハンターと姫

何とも言えない叫び声を上げて悪魔が飛び掛ってきた。少年は田の前にいる悪魔を切り捨てる、すぐさま振り返り飛び掛ってきた悪魔を斬る。

きりがないな。

大量の悪魔の屍が少年を取り囲む壁のようになつていて、ただ、その壁はかなり嫌な匂いを放つてているのだが……。

ちらり、と自分の右腕を見てみる。

悪魔のどす黒くて（しかも、くさい）血がこびりついているせいで視覚的には分からぬが、さきほど斬られた箇所からの出血がひどい。

片手で剣を扱うのももう限界だ。

”出口”を探さなくては……それも早急に。

すでに新手の悪魔たちがぞろぞろとこちらに向かってきている。血の匂いを嗅ぎつけたのだろう。

顔は人なのに身体が狼という奇妙な組み合わせの悪魔だ。

三十匹はいる。

少年は意を決して走り出した。

その姿に気づいた悪魔たちも一斉にこちらに向かってきた。

走る、走る・・・・・。
命がけの追いかけっこが始まった。

最悪の出会い

最悪・・・・・。

上品なドレス、何十人もの召使い、そして何より純血のパスト人の家系のモノ同士の婚姻によつて保たれているその黄金色の流れるような髪。

(一般人たちはさまざまな国の民との交わりによってパスト人特有の金色の髪をうしないつつある)

たつた今、最悪・・・と心の中で呟いたのは神聖パルト王国の姫シーデイスだつた。

何の苦労も無く育つた彼女がなぜこんな発言をしたのか。

そのことはこの神聖パスト王国の現状と大きく関わっていた。

神聖パスト王国はかつては大陸の3分の2を支配するほどの大國であつた。

だが、その支配からの脱退を目的して蜂起した反乱軍が神聖パスト王国が支配していなかつた大陸の残りの国ぐにと連合軍を結成。

シグル連合国となつた。

シグル連合国を神聖パスト王国が国として認めなかつたことから今回の戦争が勃発した。

始めは神聖パスト王国が優勢であつた。

しかし、序じよに勢力を盛り返したシグル連合国は最近、神聖パスト王国の領地をじわじわと奪い、追い詰めていった。

このままでは負ける。

この最悪の結果を回避するために神聖パスト王国がとった手段は政略結婚だった。

大陸一の美人と呼ばれるシー・ディスをシグル連合国の盟主と結婚させ丞を收めさせようというのだ。

もちろんこの政略結婚によつて全てが丸く收まるはずがない。神聖パスト王国は再び勢力を回復するための時間稼ぎがしたいだけでシグル連合国といえど性急に”こと”を急ぎすぎたせいでも不満の溜つている民をなだめたい、というのが本音だ。

こうして双方の利害がいつちし、”めでたく”結婚成立、といわけだ。

最悪・・・・・。

シー・ディスは再び呟いた。

いつそこから身を投げましょつか？

顔を見たことも無い男（しかも敵）の”モノ”になつてしまふくらいなら。

眼下に広がる青く、そして底が知れないほど深い海を見下ろす。

身を乗り出したその時、背後でガラスを引っかくような音が響いた。猫のような速さで振り返るとそこには不思議な光景が広がっていた。

部屋の空中に白く、細い線が走る。

なに、これ？

思わず後ずさる。ついさっきまで死のうかと考えていたことなど
こうつと頭から転がり落ちた。

さらに、恐怖は続く。

空中の白い線から手が飛び出したのだ。

(が) 出てきたのは普通の手(空中からでてくる時点で“普通”ではない)

手はまるでカーテンを開くかのように白い線を大きく広げた。

悲鳴すらのどから出てしまったところにまだ続けるの？

白い線は人が通れるほどの大きさの円に広げられ
その円から少年がシーディスの部屋に転がり込んできた。

少年は全身血まみれで、左手にはシーティスの身長ほどもある剣を握っている。

はいつくばつたまま少年は肩で息をし、円に手を伸ばした。
円の縁をつかむと今度はそれを閉じ始めた。

は？何こいつ？

え？これって……え？

シーテイスの頭の中には分けの分からない問いがぐるぐるぐる回っている。脳みそがかきまわされる。

あともうちょっとで円が閉じられる、とこうその時円の向こう側から何かがその身体をぐいっとねじっこんだ。

人・・・いやあ……身体が狼になってる！……

「畜生！入ってくんないよ！…」

恐怖に駆られへたりこんだシーテイスとは対照的に少年は悪態をつきながら立ち上がり、円を無理やりどじよつとする。

「くそったれ！…」

半人半獣の化け物に手を噛まれ、少年が手を庇った瞬間そいつは部屋に入り込んできた。

少年はさらに悪態をつき（化け物の姿は見るに耐えないがこの少年の悪態は聞くに堪えない）

円をぴしゃーーと閉じ、剣を左手でつかむ。

化け物は人の顔で狼のうなり声をあげ、少年と対峙する。

「一体だけで俺に勝とうなど無理なんだよーー！」

化け物は歯をむき出して飛び掛る。

少年は避けようとはせず、剣で化け物の身体を鼻先から真っ二つに斬った。

大量的の血が噴水のように辺りに飛び散る。

少年は玩具の取り合いに勝つた子どものよつや笑みを浮かべそのままその場にぶつ倒れた。

部屋にはシーティスのつめを粗だけが漂つた。

ハンター ジェス

さて、ここでクイズです。

部屋の中は血まみれの少年と真っ一つにされた狼のような化け物。

部屋の壁には血が模様のようにこびりついている。
まあ！－なんて素敵な模様でしょう！－

おっと話がずれちゃった。

この状況をどう解決したらいいのでしょうか？

・・・・・え？分かんない？

じゃあ私の今の状況と同じね。

あなたより私はもっと混乱してるけど。

神聖パスト王国の姫、シーディスは部屋の隅でうずくまつた動けなかつた。

とりあえず、侍女を呼ばなくちゃ・・・・・。

ゆっくり立ち上がり、ドアに向かつた。

化け物と少年を避け、大きく迂回してドアにたどり着いた。
その時、けたたましいノックの音がした。

「姫様！－シーディス様！－いかがなさいました！？
シーディス様！－」

よかつたティンだわ。

ティンは元々は幼いころのシー・ディスの遊び相手として王宮にあがつた少女だ。

パスト人とどこの民族との混血によって金髪ではなくやや茶色がかつた色の髪、ぱっちりとした大きな目。そして物おじしないティンとややはつちやけたシー・ディスはやけに気が合い

シー・ディスは彼女と別れなければならなくなつたとき大泣きして周囲を困らせた。

しかし、別れから5年後、彼女は思いがけない方法で戻ってきた。シー・ディスの側に仕えてその身を守る護衛を募集した際、数多の兵士たちを

けちらしてその座についたのがティンだつた。

5年前より身体の凹凸がはつきりした（これにはびっくりー成長期つてやつ？）

彼女いわく。

「私は元々武家の間人なんです。

本当は剣士になる必要は無かつたんですけど

シー・ディス様の側にいられるつて分かつたらやらないわけが無いでしょう？」

かる〜〜く言い放つたがその剣腕を手にれるためにどれほど苦労したことだろう？

そこまでしてくれたティンにはシー・ディスは頭が上がらない。

とにかく彼女はシー・ディスが最も信らいをおいている人物なのだ。

そしてそのティインが来てくれた。

「開けますよ……。」

ドアが強制的に破られた。そういうえばかぎを掛けていたんだったわ。

ぬき身の細身の剣を持ったティインが部屋に駆け込み、中の様子を見て大きく目を見開いた。

部屋中に血が飛び散り、剣を握った少年が血まみれで倒れている。驚いているティインにシー・ディスが抱き付く。

「これは……一体どうこう……？」

「ああ、ティン！！」

私がいきなり部屋に現れた男を殴り倒して部屋中にケチャップをまき散らしたっていうの……。」

「落ち着いて下さー。壱つてゐる」とめがやめがやです。」

シー・ディスをなだめて落ち着かせ倒れている少年から離れたところに座らせ

ティイン自身は剣を持ったままゆっくりと少年に歩み寄る。

本当に血まみれだ。この少年から流れているのかそれとも返り血か……いずれにせよ尋常ではない。

ティインは少年の剣に視線を落とした。

血がこびりつき、あちこち刃こぼれしてはいるが元はある剣だったのだろう。

今はその面影は遙かかなたに逃げてしまっているが……。

剣を取り上げようと手を伸ばした。

その時、少年の手がぴくっとわずかに動き、倒れたままの姿勢で剣を振るつた。

首に向かつてくる剣を寸前の所で押し留める。

だめだ。両手で剣を持っていても少年の片手剣に力負けしてしる。

無言の押し合いは、少年が顔を上げた瞬間に終わった。

少年はティンの顔を見てはつと目を見開いた。

「人間・・・・・。」

ティンは少年の力が弱まるのをはつきり感じた。

少年の左手を踏みつけ剣を手放させ、その首に剣を当てる。

「卑しくもここは神聖パスト王国の姫、シーディス様のお部屋。
貴様、どうやつてここに侵入した？」

苦悶の表情を浮かべ、少年はティンに食つて掛かった。
れつきまでぶつ倒れていたとはとても思えない。

「シーディス様？

ああ、俺が”出口”から入つて来た時、魔獣サキュロスみたいな悲鳴をあげたやつか。

あの悲鳴のせいで俺の鼓膜が少なからず被害を受けたんだぞ！
どうしてくれれるつてんだ！…え！？」

シーデイスは啞然として口を開けた。

魔獸サキュロス？私が魔獸？

ティンは怒りで顔を真っ赤にして、ますます剣を握る手に力を入れた。

「黙れ！…」

「それにパスト王国では怪我人の首に剣を当てるのが礼儀なのか？それとも今、怪我人に剣を突きつけるのが流行ってるのか？そのうち相手を斬るのが流行るかもな。・・・・・そんな流行は「ごめん」といふもんけど。」

「うつ・・・・・…」の・・・・・…

「止めて、ティン！…」

シーデイスが止めに入らなかつたらほんとに殺していたかもしれない。

ティンを少年から引き離し、少年をにらみつける。

「あなたもあなたよ…いきなり出てきてなによ、その態度！…」

少年は仰向けるとふう～と息を吐いた。

「…」の態度は…・・・・・誤り。すまん。

だが、ここに出てきたのはまったくの偶然だ。

”出口”つてのはどこにつながつてるかまったく予想がつかないからな。

「」の前は肥溜めの上につながつていて…・・・・・あれはくさかつ

たな。」

「”出口”？」

「そもそも貴様は何者だ？」

シーデイスとティンの問い合わせ重なつた。
少年が眉をひそめる。

「おーおい、俺の口は一つしかないんだぞ。
質問は一つにしてくれ。」

「順々に答えればいい話だらう?」

ティンが鋭く言い放つた。

「それもそうだな。
なかなか冴えてるじゃないか。」

ティンを馬鹿にしているのかもしれない。

だが、質問には正確に答え始めた。

「まず”出口”のことだが、これは悪魔の世界とこの人間世界をつなぐ通り道だ。

さつきもいつたがこれはどこにつながっているかが分からない。
だから肥溜めの上に落ちたりすることもある。

そうそう、肥溜めに落ちたときの話なんだが……

「そんな話はいい——わざと話を続け——」

「そ、うか……まあ、あんまり綺麗な話じゃないからな。
次に俺が何者かつてことだが、これは一言で事足りる。
俺はハンター。ハンター、ジエスだ。」

訳が分からぬ。答えが答えになつていねい。

シーデイスは横にいるティンに助けを求めるように見やると

彼女の顔からはすでに怒りが消え、代わりに驚きが浮かんでいた。

「ハンター…………。」

「つてなに? ティン。」

自分が知らないことを人が知つていて、しかも一人で納得している時ほど
じれつたくなりいらしゃることは無い。

「なあ・・・こうして血まみれで横になつてるのはほんとに
気分が悪いんだ。風呂、貸してくれないか?ついでに服も。」

「ねえ、ティン。ハンターつてなに?」

見知らぬ少年に風呂を貸すのはためらわれたが
ティンからゆづくり話を聞くためには少年に出て行つてもううのが
よかつた。

ティンは血のついた絨毯やカーテンをときぱきと片付け

壁についた血をふき取りながらシーティースの問いに答えた。

「ハンターは称号です。

何をしているのか分かりませんがその手は常に血塗られ
身体からは腐臭が漂つてゐるとか・・・・・。

噂だと思っていましたがまさか本当だとは思いませんでした。」

しかも口が悪い・・・と付け加えた。

「悪かつたな、口が悪くて。

綺麗な言葉ばっかり使つてると口がぬるぬるして気持ちは悪くな
るんだよ。」

まさに鴉の行水。お湯の中にゅうくつからうなびとこつ氣持ちは
ジエスにはまつたくなかつたらしい。

侍従の服を着たジエスは見動きしにくそうにしてゐる。
意外にも似合つてゐるが、手に持つた大剣がどうも不釣合いだ。
「おかげでさつぱりしたありがとな。」

あら?よく見たらなかなかいい顔立ちじゃない、この子。
髪はさつぱりとした黒の短髪で、目も石炭のように真つ黒だ。

「色々聞きたいことはあるけど、私もお風呂に入つてくれるは
テイン、私が出るまで見張つてくれる?」

「はい。」

「人を鎖に繋がれてない犬みたいにいうなよ。」

ジエスの言葉は無視して浴槽に向かう。

服を脱ぎながら色々考えた。

悪魔の世界、”出口”、悪魔、そしてジエスのこと……。
でも、あの子ちょっととなぞめいてて不思議な雰囲気があるのよね。
ちょっと気になるわね・・・・・。

浴槽に足を踏み入れた瞬間、それらは湯気のように消え去った。

緑石という石で敷き詰められた浴室はいまや真っ赤になり、さらに浴槽は血の海のよつたな有様になつてゐる。

ジエスは浴槽にしつかり入つていたのだ。

しかも湯船に入る前に血を落としながらまつたく考えずに。

ハンターの警告

血まみれ浴槽事件の後、口の聞けなくなつたシーデイスに代わつてティンがジエスに制裁（一発本気でぶん殴つた）を加えて話が再開した。

「私もハンターのことについては人づてにしか聞いたことがない。何か言いたいことがあれば聞くが、何があるか？」

殴られた頬を撫でながらジエスはいくぶん不機嫌そうに答えた。
本人にとつては悪氣は無かつたのだろうが、あまりにあれは・・・
・。

「まずお前達は根本的にハンターのことを誤解している。
悪魔を狩る者、それがハンターだ！！」

ジエスは立ち上がり熱っぽく語りだした。

「俺たちハンターは悪魔のみを狩る。決して人間に手を出したりはしない。

それが俺たちの誇りだ！！

世の中には俺たちのことを殺人者だの悪魔の手下だのいうヤツがいるが

俺たちのおかげでこの人間世界の平和が保たれてると言つても過言じゃない！！

ジエスは身振り手振りを交えてますます熱くなつていく。

「いいか？人間世界のすぐ側に、もちろん距離的にではなく

空間的な話だが、そこに悪魔たちの住む世界がある。」

シーデイスは半人半獣の化け物を思い出して身震いした。
あんなヤツらが住む世界がすぐ側にあるの。

「ヤツらは常に飢えていて凶暴で、だが大抵は知能もなく、馬鹿だ
っかりだ。

ヤツらがもし学生だつたらどんな教師だつてさじをなげちまうよ！
まあ、また間違えたの！？どうして5年も教えてるのに1+1も
分からぬの！？

先生もうやんなつちやつわ！…………ひてな具合にな。」

「どうでもいいが……」

ティンがいらいうと足を踏み鳴らす。

「その類のくだらない話を抜きにして話せないのか？」

ジェスがティンにらみつけた。

「俺は少しでもわかり易くなるようにと思つてやつてんだー。
まあ、いい。

とにかく悪魔たちが人間世界に踏み入れることは無かつた。
ところが最近それが変わりはじめた。

悪魔たちが自分たちの世界から人間世界に入り込んでくるようになつたんだ！」

「ちょっと待つて。

さつき悪魔は馬鹿ばっかりって言つたわよね？

私が先生に習つた限りでは世界から世界、空間から空間を移動す

るには

かなり高度な魔法を使わなければならぬのよ。」

シードイスが指摘した。

ジエスは最もだといふに頷いた。

「悪魔の中にも魔法を使つやつはいるが空間移動を使えるほどのやつはない。

・・・・通り道が勝手に出来てるんだ。」

「あなたはその通り道を作つていたじゃない！？」

「あれはハンター特有の能力だ。

俺たちは望めばいつでも、加えてどこからでも悪魔世界に行く力を持つている。

ただ、一度入ると簡単には出て来れない。

人間世界に戻るには”出口”と俺たちハンターが呼んでいる空間のほこりびを見つけて、あとは入ると同じ要領で通り道を作ればいい。

「悪魔たちはあんたたちの後を追つてこの世界に入つてきてるんじゃないの？」

若干の皮肉を込めてシードイスが言い放つた。

ジエスのあとを追つて悪魔が入ってきたことはまだ忘れられない。

「あれは・・・ミスだ・・・単純な・・・。

普通はあんなことはないんだ。

ただ、あんまり疲れていたから・・・・つい・・・”出口”的に悪魔が

いるのに気づかなかつたんだ。」「

視線を落とし、もじもじとジェスは言った。

その様子を見てシーディスとティエンは顔を見合わせ吹き出した。

「あはははは、なんだ意外にかわいい所あるじゃないの。」「

「とにかく！……」

2人の笑い声をかき消すようにジェスは叫び、再び威勢を盛り返した。

「悪魔たちはどうやってかできた通り道を通して人間世界に入り込んできている。

通り道が開いている時間はまだ短く、できるのも散発的だ。

通り道が開いても、それに悪魔が気づかないこともある。

だが、このまま放つて置く訳には行かない。

だから俺たちハンターが悪魔世界に乗り込み、そこで悪魔たちを殺して

人間世界への侵入を防いでいるってわけだ。」「

「しかしそれなら腕のいい戦士を集めて一緒に悪魔世界に行けばいい話だろう？

なぜ、ハンターのみで戦う？一人より集団のほうがいいはずだ。それとも通り道はハンターしか通れないのか？」

ティエンがいかにも戦士らしい考えを述べた。

ジェスが首を横に振った。何も分かつていない、そういうふう。

「いや、一度開けば誰でも通れる。

だが・・・お前はあの世界に行つたことがないからそんなこと
が言える。

一面見渡す限り血の染み付いた大地が広がり、立ち枯れた木々
空には常に厚い雲が立ち込めて、日が一切差さない。
血を絞つてゐるんじやないかと思つほどどす黒い川が流れる。」

ジェスの口にが序序に墨つていぐ、悪魔世界を思い出しているのだ
らうか。

「それにあの空氣、いるだけで息がつまる。

そして腐臭、ハンターのそれか悪魔のそれか分からぬ肉から放
たれる。

内臓、骨・・・ありとあらゆる不快な物が転がつてゐる。
何よりも24時間悪魔の襲撃に気を張らなくてはならず、そして
襲つてくる悪魔。

終わりがない・・・・・・あの数。

どんなやつでもあんな場所に長くいたら氣が狂う。
いや、ハンターだけは別だな。」

ジェスは意味深な言葉で話しを締めくくつた。部屋に重苦しい雰囲
気が流れた。

「ところで・・・一ヶ月も悪魔世界にいたから今人間世界がどう
なつてゐのか
まったく分からぬんだ。教えてくれないか?」

ほかに話すことも無い。シーデイスはゆっくり話し始めた。

ジェスは話をやえざることもなく最後まで聞いた。

シーデイスが政略結婚させられる、ということを聞いても何も反応

しなかつた。

「悪魔世界に行く前よりひどくなつてゐるのか。

・・・・・しかもまだまだひどくなるな、絶対。

ああ、それとあんた・・・シーディスさん?

あんた・・・死ぬよ。」

「！－！それってどうこいつこと！？」

シーディスは思わず声が上ずつた。ティンはジエスをにじむ。殺氣のこもつた目つきだ。

「おいおい、俺をにらんだからつて状況は何にも変わらないぜ。

考へてもみろよ、あんたは人質だ。

パスト王国が攻め込んでも、殺される。

パスト王国が攻め滅ぼされても王族の血を引くあんたは殺される。

「

正論だ。正論だけにシーディスの心に深く傷をつけた。

「まつ、向こうの盟主によつぽど氣に入られたら助かるかもしんな
いけど
あんたは・・・・・そんなふうに媚を売るのはできやうもないか
らな。」

媚を売る、確かにできそつもない。

「それ以上その口を開くな！－！」

ティンが剣を抜き、ジエスの首に突きつけた。

「あんた短気だな。損するぜ、せつかく美人なのに。短気は損氣つてね。

もちよつとカルシウムを取ることをお勧めする。
牛乳とかいりことか・・・ああ、ほつれんそつまこいらしきぞ。
ん? あれは鉄分だつたかな。」

ティンが皿をすうと細めた。手に青い血管が浮く。

「それと・・・・・・」

ジェスの口調が一変する。

この感じは、悪魔と対峙していた時と同じだ。

「調子に乗るなよ。」

ジェスは獲物を捕らえる蛇の「こときすばやけでティンの手首をつかみ
力いっぱい背負い投げをして彼女を地面にたたき付け、剣を握つて
いた

右手を踏みつけて剣を手放させた。

「お返しだ、踏まれたのは左手だったがな。」

「うう・・・・・。」

あのティンが、大の男の兵士でさえ軽くあしらつ彼女が
いとも簡単に制圧されてしまった。

「俺は真実を述べただけの話だ。

シーディスさん、あんたも覚悟を決めるこつたな。

それとも・・・・・

ジェスは空中に線を引くような動作をした。

例の白い線が現われ、ジェスがそれをつかみ広げた。
あつという間に通り道ができた。

「悪魔世界に来て、この場から逃げるか？」

振り返ったその顔に浮かぶ笑顔と歯を抜き出しにしていた悪魔の顔
が重なる。

ジェスは自分の大剣を拾い上げた。

「あなたは悪魔よ。」

シーデイスがうめいた。

ジェスはちょっと首をかしげた。

「かもな。」

こうしてハンター、ジェスは去った。
シーデイスが目を背けていた現実を突きつけて。

孤等のハンター

駆ける、駆ける。

ハンターのジエスはひたすら駆けた。

イモムシの身体をした悪魔がそのあとをのそと追つてくれる。

さきほど剣でまつぶたつにしたところの身体から吹き出した妙な液体がジエスの身体に降りかかった。

返り血を浴びるのにはつものことなので気にならない。

ところが液体を浴びた箇所がじゅうじゅう音を立てて溶けはじめたのだ
せっかく手にいれた新しい服に早くも穴が開いたのだ。

まあ、この悪魔世界で綺麗なままいるなんて雨をかわして
移動すんのと同じくらい不可能だ。

飛び道具などはもってないのでこうして逃げるしかない、とこうわけ。

もつ何日も後を着けてきている。

撒いた・・・そう思つても一口後の世界では時間の感覚が分からなくなる
翌朝、とか一時間後とかいう感覚が通用しなくなるのだ。

そのため推測で、もう何日などと言つてこる。

一念、一日経つたなと思つたら服に傷をつけて日数を数えてこる)

にはなぜかまた後をついて来ている。

同じやつなのか、それとも別の同じ種の悪魔なのか・・・よく分からない。

「あーーもうしつこい！！

これでも喰らえ、悪魔ども！――」

足元の血の染み付いた土くれを投げつける。
さすがにこんなものでは死なないが、気晴らしにはな・・・・らなかつた。

イモムシ悪魔どもの後ろから何か来る。

いやに足が長く、その割に手は短い。
丸い玉にそれらがひつついているといつかなり不恰好な悪魔だ。

はつとあたりを見回すと、足長悪魔が四方八方から走つてくる。

逃げ場はない。

足長悪魔が走りこんできた。そして丸い（これは胴体・・・なのか？）

部分から小さな穴が開き、そこから液体を吹きかけた。

イモムシと同じやつか！！

さつと横に転がって液体を避け、転がりざまに足長悪魔の足を剣で斬つた。

続けてその隣の悪魔の足を斬る。

丸い胴体と思われる箇所はあえて斬らない。

斬つたらイモムシと同じように例の液体が噴き出す可能性があるからだ。

空中を舞う、酸の液体。

それをかわしながら、足長悪魔の足を斬りおとしていく。

死のダンスは続く。

俺の動きに対する拍手喝采はいくらでもかまわないが
その代わりに酸の液体を吹きかけるつてのはひどいな。
ま、これがヤツらのえしい精一杯の拍手なんださうよ。

やがてあたりには醜い玉がじゅるりとつりめじそつこ転がった。

「やつと終わった。」

はあ、はあ、と肩で息をしているとイモムシ悪魔がすぐ側に迫つて
いるのが
分かった。くそ、また走るのか。

1匹がぶるつと震え、風船のように膨らみはじめた。

まさか・・・。

そのままかだつた。

パーンと破裂し肉片と酸液が飛び散る。

なんとかかわしたがあたりはすでにイモムシ悪魔どもに囲まれてい

る。

飛び越えるか？いや、空中ではあの酸液をかわせない。
かと言つてこのままここにいたら…………。

もぞもぞ

やつぱり酸を覚悟で飛び越えるしかない。

もぞもぞ

いくぞ！

ひざを曲げ跳躍しようとした時、思いがけないことが起つた。

ジエスのまわりを囲むイモムシ悪魔の下から赤い光が輝き
その光の上をはずりまわつているイモムシ悪魔が
どんどんとやせ細つていいくのだ。いや、正確には生氣を抜かれてい
るような感じだ。

やがてイモムシ悪魔どもは枯れ木の枝のようになつてしまつた。

「くく、なかなかいい眺めだ。そう思つだらう？若手ハンターよ。

悠々と一人のハンターが歩いてきた。

足元のイモムシ悪魔などもはや眼中になつた。

血が染み付き赤黒く染まつた髪、皮膚には血が薄い膜を張つて固ま
つていてる。

そして赤く、まるで血を流し込んだような目。

熟練のハンターだ。間違いない。

「今のは、一体？」

魔法だらうか？とにかく覚えておけば便利そうだ。

なぜかハンターというのは長く一緒にいることができない。
そのため、珍しい魔法や悪魔の情報を出会った時に相手に伝える。
そしてすぐ別れる。それが通例だった。

弟子と師匠という関係を結び共に行動することもあるが、これは例外だ。

「地中に住まう吸血鬼ブライドの放つ赤き光を浴びた者は全身の血
を抜かれ、死ぬ。

血はブライドにそして生氣は私に・・・というわけだ。
まあ、この技を使うにはブライドと契約を結ぶ必要がある。
お前では血を抜かれて殺されるだけだ、止めておけ。」

「ブライド・・・え！まさか、あなたはクレシス・・・さん？」

「異界の精霊”吸血鬼ブライド”。

悪魔とも人間とも異なるこの精霊と契約を結んでいるのは
ハンターの中のハンター、クレシスのみだ。

クレシスの”伝説”はよく聞いている。

クレシスはもう何年も人間世界に戻つておらず

（悪魔世界で食料となるものはすくない。ゆえにどんなハンターでも
数ヶ月に一度は人間世界に戻るのだ。

ちなみに悪魔世界ではハンターは食料をそれほど必要としない

これには理由があるのだが……

たつた一人で何百という悪魔と常に戦っているといつ。

しかもその悪魔は普通のハンターではとても適わないほど強いらしい。

そしてクレシスは”赤眼”の持ち主でもある。

悪魔の血は有毒だ。浴びるのも良くないが飲むなどもってのほか。しかし、その血を長く浴び続けると、序序に身体に悪魔の血が浸透し目が赤く染まつてくる。

つまり熟練のハンターである証拠が”赤眼”なのだ。

ただ、”赤眼”になる前にも様々な変化が現われる。

例えば悪魔世界にいる間は食料がほとんどいらなくなる。人間世界よりも悪魔世界にいるほうが、まるで家にいるようなしつくりする感じがある、などなど。

よつするに、悪魔に近づいていくのだ。

つまり強いハンターであればあるほど悪魔に近い存在になるのだ。しかし悪魔に近くなることに抵抗があるハンターなどビリにもないな

い。
悪魔を殺すことがハンターの宿命であり、人生そのものだ。そのためならなんだつてなつてやる。

クレシスはその場に座り込み、手を振つてまあ、座れというふうな手振りをした。

側に座ると、クレシスは枯れ枝に火をつけた。ぱちぱちと炎がはぜる。

「まず自己紹介からだな。知っているようだが私はクレシスだ。」

「私はジェスです。」

クレシスが目を細める。

お、もしかしてご存知なのかな？

「知らんな。」

がくつ、まあ、そんなもんだろ。

「ジェス、お前に聞きたいことがある。
ずいぶん身なりがいいようだが、つい最近、人間世界に戻ったな
？」

「あ、はい。」

「様子はどうだ？」

ジェスはシーディスたちから聞いた話をそのまま伝えた。
それにしててもティンつてやつはなかなか骨がありそうだった。
あんな別の方はちょっと悪かつたかな。

クレシスは悩み深そうな表情を浮かべ、黙り込んだ。

「戦乱は拡大し、このままだと強大な勢力がぶつかってしまうのか。
ふむ・・・・・・・・・・ジェス、自慢ではないが私は長くこの悪魔

世界で

戦つてきた。」

うん、どう聞いても自慢にしか聞こえない。が、黙つておいた。
え？あの2人の時と対応が違うって？

そりやあ今日の前にいるのは大先輩だからな。
先輩は立てる。これ鉄則。覚えておいて損はないぜ。

「その中で気づいたことがある。

自然に通り道が出来る回数がだんだん増えてきている。
たまに出会うハンターからの話とこの事実を照らし合わせてみて
私は1つの仮説にいきついた。」

「なんでしょうか？」

猫被つた俺。自分で言つのもなんだが・・・似合わね〜〜〜。

「通り道出現数は、人間世界の戦乱の拡大と比例している。」

「！え、じゃ、じゃあもしパスト王国とシグル連合がまた戦争を
始めたりしたら・・・。」

「互いに次に刃を交える時には徹底的に相手を潰そうとするだろう。
人間世界に血の海ができた時、”出口”が大量に出現し悪魔たち
が一斉に

人間世界に入り込む可能性が十分ある。」

「でも・・・あの失礼ですけど、それって可能性ですよね？」

クレシスがジエスと視線を合わせた。

今までどんな恐ろしく、醜い悪魔ににらまれてもなんとも思わなかつた

ジェスの背中に冷たい汗が流れた。

蛇ににらまれた蛙・・・ってかアナコンダににらまれたアマガエルつて感じだ。

「何年か前にこの悪魔世界のいたるところに”出口”が出現した。閉じても閉じても、”出口”は現われ、悪魔どもがそこを通りうとした。

その時はなんとか食い止めたが、後にその時、人間世界にいたハンターに

話を聞くと、丁度その時パストとシグルが戦争をしていたといふ。また防げばいい、などとはいうな。

その時の戦いで多くのハンターが命を落としたのだからな。」

「では、なんとしても戦争勃発を防がないと。

しかし両国とも今回の結婚はただの時間稼ぎって感じで準備が整つたらまた始めちゃいますよ。」

「・・・・・連合軍盟主と姫の結婚か。

盟主の方が本気で戦争を止めようとしたら、どうだ?」

確かに盟主の意見ならばむげにはできない。

シグルは連合国だから盟主の意見だけがすんなり通るわけではないだろうが
止めることができるとすれば盟主だけだ。

「可能性はありますよね。

でも、姫のほうは媚を売れるような性格じゃなさそうですよ。」

クレシスがふんっと鼻を鳴らす。

「自分の国が戦火に包まれるのを防ぐためならなんだつてするだろうさー！」

それよりも心配なのが暗殺だ……特に姫のな。

戦争が終わることに不満を持っている連中が姫を暗殺したら
パストはその仇討ちに出るだろ？

そして再び戦争勃発、というわけだ。」

「でも、護衛がついてますよ……腕のいい。」

自分がティンを難なく制圧したことと思い出したせい
この言葉は虚しく響いた。

クレシスは自信のなさを感じ取ったのかすぐに言葉をついだ。
「ジエス、姫とその護衛と出合つて言葉を交わしたお前ならば
2人に接近することができるのではないか？
そして姫が盟主を説得するまで暗殺者からその身を守ることを
提案できるだろ？？」

「……出来る限りやつてみます。」

しまつた。じんなことになるならあんないとすんじゃなかつた。

ジエスの後悔を尻目にクレシスは満足そうに頷いた。

「では適当な”出口”からすぐに入間世界に戻りパストに向かえ。」

「あの、クレシスさんはこれからどうなるのですか？」

人間世界には戻らないのですか？」

もつすでにどこかに向かおうとしているクレシスに質問する。

背を向けていたクレシスは首だけをこぢりに向けた。

「私は今ある悪魔を追っている。

その悪魔は今までの連中とは明らかに違う。
みずから”出口”を探し、人間世界に入ろうとしている。」

通常悪魔はみずから”出口”を探すことはない。偶然見つけた”出口”から出て行く。

「何が目的なのかは分からないが放つて置くわけにもいかんからな。
それに・・・私は悪魔世界に長く居すぎた。もう人間世界の空
気は私には
合わんのだよ。
では、ジエス、頼んだぞ。」

そういうとクレシスは再び暗い悪魔たちの世界に戻つていった。
その目は出会った時よりも赤く輝いていた。

ジエスは”出口”を探して歩きだした。

ここはシグル連合国のある元老院議員の部屋。
豪華なイスに深く腰掛けている男は自分の判断は間違つてないと思
つていた。

反対する者もいるが、どの道この類の汚いことは汚い連中に任せるのが一番。

しかも腕は絶対の保証つきだ。

「獲物は普段お前達が相手にしている悪魔ども比べたら
はるかに楽に仕留められる。」

2人の暗殺者の態度はまったく違う。

「ふう～ん、ま、金くれるんなら悪魔だろうが一般人だろうが
スパッとやつてやるけどな。」

「どうでもいい・・・・早く標的を教える。」

「標的は神聖パルト王国の姫、シーディスだ。」

「楽勝！..」

「簡単だ。」

そういうと2人はさつそく暗殺に向かった。

議員は口の端を吊り上げて笑った。

あの2人のハンターを手に入れたのは大成功だ。

狂ったハンターが神聖パスト王国の姫にせまる。

再会そして・・・

二二三日間の間にシードイスをねらつた暗殺者が五人送りこまれた。そのいずれも翌朝にはただの肉の塊となつたのだが・・・。

その暗殺者たちの（ありがたくない）訪問がここ最近ぱったりと止んでいた。

それはそれでいいのだが、ティンには不気味に思えた。

嵐の前の静けさ、という感じがどうもぬぐえなかつたのでティンはシードイスの部屋の中で寝ずの番をする許可をもらひそして今、じうじて護衛をしているのだ。

親友、シードイスのおだやかな寝顔。

彼女がこんなに安心できるのは夢の中だけになつてしまつた。

自分を狙つ暗殺者、そしてあのくそつたれのハンターのジョースの不吉な死の予言。

それらのせいでシードイスの精神はかなり傷つけられた。

月の光が窓からわざかに差す。

今日も何事も無く過ぎていこうとを祈る。

ティンが窓を何気なく見たとき、ひょいと何かが顔を出した。

ジエス？

一瞬そう思つたがすぐに違うと気がついた。それと同時に剣を抜く。

「こんばんわ、お嬢さん。」

全体的にじりじりぱりぱりと身なりでジエスとはまるで違う。

ただ、共通点もあった。

目が充血したかのように赤いのだ。

窓の外から満面の笑みでこんばんわ、などとこうヤツがまともだと
は思えない。

ティンは剣を突き出した。

静寂をガラスの割れる音が破壊した。

剣は虚空を突いていた。

「な、何へどうしたの、ティン？」

「おつと、起きちゃいましたか。どうかお気になさらず。
あちらのお嬢さんの歓迎の方法が少し過激なだけですよ。」

男はいつのまにかシードイエスのそばに立ち、こじやかにシードイエス
に微笑んだ。

だが、その笑顔も暗闇に光る赤い眼のせいで不気味だった。

「くそ……」

ティンが男に斬りかかる。

男はふう、と息をつき、短剣を抜くとティンの剣を受け止めた。

びくともしない。右に斬つているようだ。

ティンは一步距離を置き、頭、胴、正確でなおかつ鋭く斬る。

下手に力で対抗しても勝てないのはジエスとの一戦で分かった。力で勝てないなら技、速さで勝負。それで今まで勝ってきたのだから。

さすがに短剣で全てを受けることはできず男の身体から血が吹き出る。

ティンがシーディスと男の間に割つて入り、剣を構える。

「へえ・・・・・」

男の顔から笑みが消え、流れ出る血を興味ふかそうに見る。意味の無い笑顔も不気味だつたが無表情はもつと不気味だ。

「衛兵……敵だ……敵襲だ……！」

ティンが間髪を入れずに叫ぶ……が、何の反応も返つてこない。どういふことだ？

「ああ、無駄無駄。今頃俺の仲間がさ……」

今頃、ダンスでも踊つてんじゃないの？ワン、ツー、ワン、ツー
つてね。」「

いかにもジースが言いつた台詞だ。

だが、この冗談が意味することは……。

「相棒が頑張つてゐるのに俺がさほひちやダメだよな。」

男が視線を上げティエンを捕らえる。

「ヒナを殺すにはまず親鳥から。

親鳥さん、Are you ready? . . . ?

言葉はふざけてゐるが、口調と眼は冷淡そのものだ。

「シーデイス様、離れていて下さい。」

男が短剣を抜き、一気にティエンとの距離を詰める。

突き出された短剣を弾くと、すぐに蹴り、それを半歩引いてかわすと
拳・・・・・息つく間がない!!

短剣を猛烈な速さで繰り出し、ティエンが攻撃しても手や足の防具で
防ぎ
そして足蹴りや拳で攻撃する。

しだいに壁際に追い詰められる。

なんとか反撃しようと攻撃したのが間違いだった。
袈裟斬りはあっさり防がれ、逆に腹に蹴りを喰らってしまった。

思わずひざをつぶ。

「あんたは一本、俺の武器は4本・・・・手数が違うよな?」

薄笑いを浮かべた男の顔に剣を突き出したがあつさり止められた。
そればかりか手の甲を斬られ、剣を手放してしまった。

男はティンの剣を蹴り飛ばし、彼女の首をわしづかみにして
その首に短剣を押し当てた。

「いいなあお前。元氣があつてさ。

こんなに手」たえがあつたのは悪魔と戦つて以来だ。」

「やはり・・・ハンター・・・か・・・!」

「おー分かったの?・・・俺が赤眼だからかな?
まあいいや。

まあて!!こつからがお楽しみだ!!

まずは手の指を一本一本落としていく。次に田玉をえぐりだす。
イモムシみたいに転がりまわる姿を想像するだけで・・・
ああ・・・お前はどんな悲鳴をあげるんだろうなあ・・・。

ぞつとした。

男は恍惚状態になつていて、これは脅しなんかじゃない。
本気でやるつもりだ。

ティンは死力を振りしぼつて男の指に噛み付いた。

なんとか男の手から逃れたがすぐに足蹴りをされ
踏みつけられた。

「安心しろよ。時間がないから普通の半分で勘弁してやる。
まあ・・・・」

男はそこでせせら笑つた。

「悪魔でも耐え切れない痛みだけど、な。」

ティンの首にスーーと傷をつけた。

その時男の肩越しに壺を振り上げたシーディスが現われた。
そのまま壺を男の頭に振り落とす。

パアーン！－！

響き渡つたのは壺が割れる音ではない。
男はすばやく振り返り、シーディスをはたいたのだ。

「ほんとに元気いいな。

お姫さん、あんたもあとでかわいがつてやるからそこで待つてな。

「

シーディスは地面に倒れ、動かない。

怒りが湧き上がる。

だが、踏みつける男の力は強く、押しのけることができない。

「力が無いってのは不幸だよな。」

男の短剣がティンの指の上に滑る。

斬りおとされる…！

そう思つた瞬間、男の悪魔のよつた笑みが一瞬で引き、ティインの上から飛びのいた。

男の後を追つよつて何かがティインの上を飛び越えた。

「ジヒス…！」

今度こそジヒスだった。
そしてティインの意識はここで途切れた。

狂ったハンター

顔は怒りに燃え、大剣を握る手には血管が浮いている。

「てめえ・・・今何してた?」

男はなんの悪びれた様子もなく肩をすくめた。

「何つて・・・”いいこと”しようとしてたんだよ。分かるだろ?お前もハンターなり。」

「殺そうとしてたんだろうが!!!
このハンターの面汚しが!!!」

ジエスと最後に別れたときも怒り・・・ではないがそれに近い感情を
ティンは向けられた。

だが、今回は純粋な怒りだ。ジエスが本氣で怒ってる。
「俺たちは悪魔しか殺さない!!!
それがハンターの誇りで生き様だ!!!」

男の顔に露骨な不快感が浮かぶ。

「考えが古イんだよ!!!
お前だつてさあ、悪魔を殺すことに快感を感じるだろ?
俺の場合はそれが人にすり替わつただけの話だ。」

ジエスの堪忍袋の緒が切れた。

大剣を振りかざし、男に斬りかかった。

斬りおとされた大剣を短剣で受け止め、男が蹴る。

ジェスがそれをかわし、振り上げた大剣を今度は横に振る。

激しい斬りと打撃の応酬が続く。ジェスは重量のある大剣にもかかわらず

それを柳の枝を振るかのように斬つていく。

男は短剣と打撃技で攻撃する。

ハンター同士の戦いは熾烈を極め、両者に小さな傷ができるが致命傷でなければお互いにさけることはしなかつた。

だが、やがて経験の差か、ジェスのほうが押され始めた。

大剣は当たれば致命傷になるが、当たらなければ意味が無い。

ジェスの剣撃は空を裂くばかりで、かすり傷をつけるのが関の山だつた。

男の足がジェスの足をすくい、ジェスの体勢が揺らいだ。

男の短剣がジェスの肩を貫いた。

そしてその傷に蹴りを入れ、苦痛で歪むジェスの顔面を殴りつけた。

「つつ・・・・・。」

「はっ！しょせん新米ハンターなんてこんなもんだ！！

まだ完全な赤眼にもなつてねえのに調子乗つてんじゃねえ！！」

男の眼はもはや完全な赤と言つてもよかつた。

そして丁寧な口調も、無意味な笑いもどこかに吹き飛んだ。

男が短剣を振り上げる。

今までにジロスに振り下ろされたようとした時、ガラスを引っかくような音と

ともにジロスと男の間に白い線が走った。

「わあ、こんな時に……！」

白い線が両方にわずかに開き、その間を縫いつゝに向かが這い出してきた。

作りそこなつたゼリーのような形で全てが真っ黒だ。

みるからにゐるゐしている”それ”は床にまどりと無様に落ちると足も手もないのこするすると男が入ってきた窓に向かつた。

空中に出来た”出口”の中から赤い針が飛び、”それ”に刺さつた。針は床にまで食い込んで、”それ”はくさびに打たれたようになり動けなくなつた。

「やつと追つ詰めたぞ……ゼリーラー！」

”出口”をひじ開けて出てきたのはクレシスだ。

「クレシスさん……」

「ジロス……なぜ、ここ……？」

ジロスの叫びにクレシスが反応した。

男もクレシスといつ言葉には聞き覚えがあつたらし。

「クレシス……だと……。」

そいつぶやいた。

その時、”それ”……クレシスがゼミラと呼んだ悪魔（？）が風船のようにふくらみはじめた。ジェスにはその光景は見覚えがある。イモムシ悪魔と同じ……なのか？

「くそっ、ジェス！…その子を守れ！…」

言うが速いかクレシスは床で氣絶しているシーディスを覆いかぶさつた。

ジェスはクレシスに言われたとおりシーディスと同じく意識の無いティンに覆いかぶさつた。

眼の端に男が逃げ出すのが見えた。

だが、どうすることもできない。

あたりが一瞬が暗くなり、そして……静寂。

真っ暗だ……あ、これは私が目を開じてるせいか。
でも、この胸の苦しさは一体……？

ティンが目を開けた。

はつきり言おう。あれは事故だ。

悪魔の自爆から動けないティンを守るために身を挺してかばった。

”手を置く場所”に気をかける時間などなかった。

・・・・たとえそれが胸の上であつたとしても、仕方なかつた。

しかしティンは怒つた。

ハンターとの戦いで服があちこち破れ、その破れ目に俺の手が入り込み（ぐぢこじうだが、わざとではない。じやくせにまぎれてそんなことはしない）直に胸に手が触れていたからだ。

やつは守るためにかぶさっていた俺を蹴り上げ（ビームを蹴ったかつて？
うむ・・・・・男性諸君なら分かるだろう）。俺の口からいえないな。

これ以上この話の品を下げるたくないの（でね）
けたたましい悲鳴（雄たけび、と言い換えてもいい）をあげ、俺ほ
おを打つた。

「ここの、変態！……」

ところありふれた台詞とともに。

クレシスが部屋の内に入ってきた。

表情は暗く（笑っているのも不気味だけどね）それを見れば城内が
どういう状態なのがよく分かった。

「半数以上が死んでる。

まあ、一撃で殺されたようだから痛みは感じなかつただろ？
それだけが救いだな。」

ハンターに刺された傷に包帯を巻いていくぶん痛みの引いた俺が
クレシスと向き合つ。

「普通の人間じゃあこんなことは無理です。
やつぱりハンターでしょうか？」

「たぶん。」

ティンが横から口を挟む。

「あんたと戦つたやつが、相棒がなんとかとか言つてたわ。

・・・・・あんたと同じでくだらない冗談が好きなやつがね。」

「おい！くだらない冗談ってなんだ。くだらないって……しかもあんなやつと一緒にすんな……気分が悪い。」

実際思い出すだけで鳥肌が立つ。

「人間に手を掛けるようなハンターなんかくそつくらえ……」

「ふん！同感だな。」

クレシスもティンからハンターがシーデイスの暗殺者であったことを聞いたとき以来、かなり不機嫌になっている。

「私がその場にいればハツ裂きにしてやつたものを……ゼミラの自爆のじわくさに紛れて逃げおつて……くそつ……」

クレシスは吐き捨てるように言つて床に腰を下ろした。

「あの……とこりあなたは、だれ……ですか？」

シーデイスがおずおずと言つた。

まあ、それもしょうがない。自分を殺しにきたやつと同じ赤い眼といふ特徴を持つていて、そもそもそつじゃなくとも血まみれで突然現わされた

人物を不審に思つるのは至極まつとうな感情だ。

「ハンター。」

ある悪魔を追っている途中でここに来てしまった。

安心しり、ジェスと同じく”まとも”なハンターだ。』

”まとも”なハンター。悪魔しか殺さない。

”狂った”ハンター。人間、悪魔の見境なく殺す。

女性陣にこの判断はついただろつか？前に俺が説明してやつたから大丈夫だろ。

「あ・・・・・そうですか。」

うへへんやつぱり微妙かな。

一応敵じゃないことは云わつただろつかそれだけでもよし、としょい。

「クレシスさん、ちつきのあのゼリーみたいなやつ……ゼリット
てのが
ずっと追つていた悪魔ですか？」

「つむ。私の失態だ。やつのこの人間世界への侵入を許してしまつた。」

「でも、自爆しましたよ。」

部屋の中にはまだゼリットの肉片が落ちている。
ティンが部屋の隅の集めたのだ。

「やつはああして自爆してもじょりくすると別の場所で再生する。
一週間かそこいらだな。

殺す方法が分からんやつかいな悪魔だ。

ゼリットをまた追わねばならんところには狂ったハンター

が2人。

問題が多くすぎるな。

ところで、ジェス、お前がここにいるといつてはパストか？」

「はい。あっちにいるのがパスト王国の姫、シーデイス。で、こっちがティン。なまいきなただの護衛です。」

ティンが俺の足を思いつきり踏みやがった。

くそっ！誰のおかげで命があつたと思つてんだ。

「あの話はもうしたのか？」

「あ、いえまだです。

おい、これから大事な話がある。お前はいつまでもそんな目で俺をにらむな！」

いいか？」

ここで俺は戦乱の拡大と通り道の数の増加は関連しているということこのままパスト王国とシグルが戦争を始めたら悪魔たちが人間世界に乗り込んでくること

そしてそれを阻止できるほどの数のハンターがないこと……
を話し
そして核心を続けた。

シーデイスがシグル連合の盟主を説得して戦争を回避することがこの人間世界を守る唯一の方法だということを話した。

しばしの沈黙・・・・そして。

「つまり、私に今回の政略結婚を受け、敵の盟主を誘惑して戦争を回避させる、ということですか……。」

清純そうなシー・ディスの口から“誘惑”といつ言葉が出たのは意外だが

そこまで分かつてゐるなら話は早い。

「方法はどうでもいいが、そういうことだ。」

すっぱりとクレシスが言い放つた。

「私が……つらい思いを我慢すれば多くの人が救える。」

「つらいって……シグルの盟主はもしかしたらイケメンかも……」

「

「顔は存じませんが歳は私の3倍です。」

シー・ディスは15～6だから48くらいになるな。おっさんじやん。

「ああ……そうか。

でも、つまくいいたらハンターたちの間であんたの銅像を創つて毎日崇めるよ。シー・ディス様、ありがとうございます～～ってね。

「

またしても俺の口が災いを招いた。

ただ今回はティンよりも早くシー・ディスがぶちぎれた。

「ふざけないで！！

私にも・・・私にだって自分の好きな人と結ばれる権利があるはずよ！！

私は聖人君子じゃない・・・・ただの人間よ。

自分だけを犠牲にするなんて・・・・できないわ。」

そういうて泣き崩れた。

王族と盟主の結婚。

おそらく”関係”を持つことになるだろう。

少女にとつては（男の俺がどうこいつ問題ではないが）かなり嫌に違いない。

夜はとつぐに明けていた。

結婚まであと3日。

そもそも今回の政略結婚は俺やクレシスさんが提案したものじゃない。

それなのに輿入れのため、シグル連合に向かつ間もシーディスは不機嫌なままだった。

まあ、気にしないことじよつ。

俺は俺で他人のことにかまつてられないほど忙しかったのだから。

狂ったハンター襲撃から輿入れまでの3日間、クレシスさんが俺に稽古をつけてくれたのだ。

キツイなんてもんじゃない。

ゲロ吐いて、血も吐いて、時に理不尽なことまで要求された。

そしてクレシスさんは輿入れの前にゼリラフを探すためにどこかへ向かった。

一本のビンを俺にわたして。

「いいが、負けたことは気にするな。

お前の恥は敵の血をもってぬぐえ。

・・・これはいざ、といつときになつたら飲め。役に立つはずだ。

」

「なにほ～としてんの？」

「どうせ新しいくつだらぬい冗談でもかんがえてるんでしょ？」

ティンが前を向いたまま言った。

つたく、こいつは俺の頭を冗談製造工場かなにかと勘違いしてんじやないか？

それに俺がいうのは”べつだらない”じゃなくて
高尚で優雅で巧みで・・・・・・・（・・・・・・・部分には好きな讃
め言葉を入れてくれ
俺の冗談のすばりはこの3語だけでは言い尽くせないからな
（な）
そしてみごとに的を射てる。

「まだ、胸を触ったこときこしてんのか？」

俺は全然気にしてないぞ。

あんなもん触っても嬉しくもなんともない。」

パンと俺の頭が派手な音を立てる。

すたすたとティンが早足で俺から遠ざかった。

「”あんなもん”で悪かったわね！――」

捨て台詞まで吐いてこきやがった。

「ななこと言つてねえだろ・・・・・・。

忘れよつたつて・・・・・・・・うへへん・・・・。

ジェスは雑念を振り払つかのように頭を振った。

敵国の王女に対する出迎えは表面上は好意的だつた。

庶民の口には一生はいらない豪華な料理。華やかな曲芸、音楽。（ちなみに俺はシーディスの小姓として紛れ込んでいたのだがこの式典の会場には入れず、別の部屋で粥かゆみたいな味気ないものを食わされていた。）

その夜、シーディスの部屋に呼ばれた。

中にはむすつとしたティンが、ただ一人座つていた。

「あれ、姫様は？」

「…………部屋。」

「ここの部屋？…………いねえけど。透明人間になつちつた？
出てこーい。」

「シグル連合盟主ティールマンの部屋……」

「…………ああ、”そーゆーこと”。
…………早すぎない？その…………ねえ？」

さすがに女性の前で堂々と言つわけにはいかず少しばぐらかした。

「姫様来てからまだ一日も経つてないじゃん。」

「呼ばれたのよ。

彼女、もう泣きもしなかつたわ！

…………どうしてあげればいいか、全然分かんなかった。」

「まあ、仕方ないって。」

そういうてジェスはイスにもたれた。
ティンのにらみもまつたく意に介せず。

「戦争になつたら、”出口”が開く。悪魔が人間界に来る。
人間全滅・・・はい、お仕舞い。

10救うなんて不可能だ。1か2は犠牲になる。」

「よく言えるわね、そんなこと!」

あんたが犠牲になる立場だつたらそんなこと言えないとせに!」

「まあね。俺は犠牲になる立場になつたことないから。」

怒りを通り越して憎惡の感情がティンの顔に浮かんだが
それは彼女がうつむいたせいで見えなくなつた。
ジェスもそれ以上軽口をたたく気になれず、黙つた。

「あんたは・・・ハンターとしてじゃなくて
あんた個人としてはどうなの?今回のこと。」

沈黙をティンが破る。

うつむいた顔をあげ、視線をジェスに向けていく。

「・・・・馬鹿馬鹿しいね。

政治なんて別に興味も関心もないけど・・・・・
人の気持ちを無視するようなやり方は虫酸が走る。
だからつてお前の味方する気はない。
おれは公私ははつきり分けるタイプだかんね。」

ハンターとしてじゃなく”ジエス”という人間の意見を初めて聞いた気がした。

ティンは真剣に聞き入っていたが最後の最後にふざけた口調が滑り込んだので

興ざめした。・・・しかし、それでも・・・ジエス個人の人となりは意外とマトモなのがもしけない。そう思った。

「姫様のところにいくか？」

「え？」

・・・・いやよ。そんな・・・覗くつもりなの？
口も悪い、スケベなんて最低よ。取り得がないやつね。」

「ばーか。そんなんじゃねえよ。

護衛だ、護衛。”やつてる”最中に襲われたら誰が守るんだよ。
部屋からちょっと離れた場所で待機して・・・姫様が悲鳴の一つ
でもあげれば突入。うまくいけば姫様の貞操が守れるかも。」

「・・・やっぱあんた最低だわ。」

パスト王国の姫、シーディスの護衛だ。

この言葉1つで盟主ティールマンの部屋まで衛兵に案内された。
ただ、部屋まであと100メートルといつとこりで止められた。

「では、私はここだ。

・・・これ以上先には進まぬようお願いいたします。」

そうじつて衛兵は引き下がった。

「あのやうや。俺のことちらちら見てやがつたぞ。
礼儀を知らんやつちやな。」

「あんたが小姓の格好のままだからよ。
・・・・とこりでこのぴりぴりした感じ、なんのかしら。」

「ティールマンつてやつが発するエロオーラかも。」

「次、下品な」と言つたら刺すわよ。」

「へいへい。ん～～と、これは・・・・・結界だな。
ま、俺にとっちゃ何の障害にもなんない程度の強さだけどな。」

「破れるの?」

「楽勝。対人用の結界だから”純粋な”人間じやないハンターには
効き目が薄いんだよ。」

「ハンターには魔法は効きにくいつてことね。
つてことは悪魔にも?」

「ん～・・・たぶん、そつかな。

ハンターで戦闘用魔法を使う人なんてめつたにいないからよく分
かんねえ。

あ、でもクレシスさんのブライドは・・・でもあれは・・・ん～
・・・・。」

「ジエス!!」

「なんだよ！人が考へてる時に！」

「あんたの脳みそじゃ何年かかったって口クなこと思い浮かばないわよ！」

それより、あれ！」

ティーンの指さす方向に目をやると2人の人影がティールマンの寝室の前にたつていてる。

「どうやつてあつこまでいったんだ？」

俺たちに気づかれずに行くのはimpossibleだろ。」

寝室までは一本道になつており、通せんぼするよう立つていた2人に気づかれずに通るのは確かに不可能だった。

「取り押さえるわよ。」

剣を抜いてティーンが言った。

ジェスも同じく剣を抜く。室内なので大剣は使えず、代わりに少し短めの剣を使うことにした。

謎の2人はドアの前でじそじそやつている。

もし後ろを向けば獲物を狙う猫の」とく近寄る2人に気づいたらうに・・・。

「おい！」

ジェスの声でぱつと謎の2人は振り返ったが、時すでに遅し。ティンの剣がのど元に、ジェスの剣も別の男に押し当たられた。

「まぬけなやつだな。俺たちが見えなかつたのか？」

ジェスがいやらしく笑う。組み伏せられた男は困惑しきつている。

「なーーどういふことだ、なぜ、見えるーー？」

”田ぐらまし”はしつかりかかっていたのに・・・・・・

「あ、魔法使つてたんだ？でも残念！！”俺”には効かねえ～よ。・・・・・あれ？じゃあなんでお前は見えたんだ？」

ジェスがティンを見ると、彼女は目を見開き、取り押された男を見ていた。

「ジェスター・・・様？」

「きみは、シーディス王女の護衛の・・・ティン・・・だつたかな？」

放してくれ。僕たちはきみらが考えていようつなことをじにきたわけじゃないんだ。」

「しかし・・・それは・・・。」

「なんだよ、」

「こいつは・・・この方はシグル連合の盟主ティールマン様の、いじ子
息ジエスター様だ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4818p/>

悪魔と剣士と

2010年12月13日23時10分発行